常陽新聞　2014年

# つくば市民放射能測定所2周年

4/7

## 茨城大学教授が報告会で講演

つくば市妻木で食品や土壌などの放射性物質の測定を実施している「つくば市民放射能測定所」が開設から2年を迎えた。活動実績などの報告会が6日、同市天久保の筑波研修センターで開催され、約70人が参加した。

茨城大学農学部の小松崎将一教授が講演で「土壌中の放射性セシウムは作物に移行しにくい」と述べ、理由として「粘土鉱物はマイナスイオンを帯び、陽イオンの放射性セシウムは（粘土鉱物に）吸着される。土は多くの陽イオン保持機能を持ち、放射性物質が作物に移行することを阻止している」と説明した。

また、試験データを基に「放射性物質を作物に移行させない方法でもっとも効果的なのは、土をよく耕すこと」と述べ、堆肥の活用も効果的だとし「堆肥から作物への放射性物質の移行はほとんど無い」と説明した。

タケノコについても「親竹の更新を早め、竹林の密度を適正にすることで、安全なタケノコ生産につながることが認められた」とし、実証例として「牛久市内の竹林から収穫されたタケノコのセシウム量が、食品の安全基準値を大幅に下回っている」ことを挙げた。小松崎教授は「風評被害については『食べることによるリスク』ばかり指摘されるが、地域の農産物を『食べないことによるリスク』もあることを理解する必要があると思う」とした上で「この地で頑張って農業をやってきた人がいる」と、農家をねぎらった。

その後、同所のスタッフたちが、2年間で合計748件の依頼測定があったことなどの活動実績を報告した。

（崎山勝功）

会場からの質問に答える、茨城大学農学部の小松崎将一教授＝つくば市天久保の筑波研修センター